

第73回車座集会意見交換内容（多摩区）

- 1 開催日時 令和7年2月9日（日） 午前10時00分から午前11時52分まで
- 2 場 所 多摩区保育・子育て総合支援センター
- 3 参加者等 参加者23名、傍聴者6名 合計29名

<開会>

司会：定刻となりましたので、ただいまから第73回車座集会を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます多摩区役所地域ケア推進課の中山と申します。よろしくお願いいたします。

今回は「地域で見守る子育てしやすいまちづくり」をテーマに意見交換を行ってまいります。

初めに、行政からの出席者を紹介いたします。福田紀彦、川崎市長でございます。

市長：おはようございます。よろしくお願いいたします。

司会：佐藤直樹、多摩区長でございます。

区長：おはようございます。どうぞよろしくお願いいたします。

<市長あいさつ>

司会：それでは、福田市長からご挨拶を申し上げます。市長、お願いいたします。

市長：皆さん、改めましておはようございます。今日は車座集会に参加いただきまして、誠にありがとうございます。73回目を迎える車座集会なんですけど、いろんなテーマでやってきました。でもこの雰囲気は初めてです。本当に真ん中にお子さんたちがたくさんいて、こういう温かい雰囲気でする車座集会は初めてなので、どういう感じになるかというのはちょっとやや不安ではありますが、ぜひ有意義な会にしてまいりたいというふうに思っています。

子育て、やっぱり私の妻もそうなんですけれども、川崎出身ではないのでこの辺りに友達がいなかった。妊娠・出産というときもそうでしたけど、非常に不安を感じていた。川崎は本当に転入出がすごく多いので、そういう方がとっても多いんじゃないかなというふうに思うんですね。その不安をなるべく解消する策というのはどんなものがあるのかなということをみんなで話し合っていければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

<参加者紹介>

司会：福田市長、ありがとうございました。

次に、参加者の皆様でございます。本日は、子育て中の皆様をはじめ、子育て世帯と関わりのある地域の企業や団体、大学生など、計23名の皆様にご参加をいただく予定でございます。お子さんも一緒にご参加いただいておりますので、適宜中央のプレイマットもご利用いただければと思います。

ご参加の皆様につきましては、こちらからお名前などをご紹介しますので、その場でお手をお挙げいただければと思います。また、お手元の資料17ページのプロフィールシートにつきましても併せてご確認ください。

それでは、1番、子育て中の田中香寿美様。2番、同じく子育て中の田中識史様。3番、川崎中野島郵便局の安藤芳宏様。4番、子育て中の向井沙織様。5番、土淵自治会の松澤明美様。6番、民生委員でここに

ちは赤ちゃん訪問をされている木澤静雄様。7番、子育て中の北野香子様。8番、あゆみYELL代表の大庭美代子様。9番、YUENHAI R美容室の吉野耕平様。10番、子育て中の川崎なつみ様。11番、スーパーマーケットいなげやの島田裕樹様。12番、子育て中の阿部真梨子様。13番、多摩ファミリークリニックで看護師をされている石原由紀様。14番、子育て中の中島萌様。15番、専修大学生の南雲健人様。16番、子育て中の渡邊美緒様。17番、多摩ソーシャルデザインセンターの蒲菜南様。18番、子育て中の若宮鈴香様。19番、あゆみYELLの嶋村沙織様。20番、多摩ファミリークリニックで医師をされている大橋博樹様。21番、子育て中の成田友仁様。22番、子育て中の成田裕理様。23番、NPO法人ままとんきっずの鈴木雪絵様。以上の皆様になりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

<ねらい・進め方>

司会：続きまして、本日のねらい・進め方について、地域支援課長から説明いたします。

地域支援課長：多摩区役所地域支援課の曾我と申します。

資料の4ページをお開きください。前方のスクリーンにも投影をしております。

多摩区では、区画整理により大規模マンションや住宅の建設が続くなど、転入者が増加しており、市や区で行うアンケート調査などから居住年数が少ないほど近所との交流がない割合や子育て施策への期待が高く、新生児訪問や健診などの現場でも子育てに関する孤立感や不安感の声を聞くなど、これらが課題であると認識しています。

ページ下段になりますが、こうした子育てに関する課題がある中、昨年11月にはこちらの「多摩区保育・子育て総合支援センター」が誕生したところであり、本日の車座集会では、未就学児童の子育てに不安を感じる子育て世帯を地域で見守る仕組みづくり、孤立化を未然に防ぐための働きかけ、多摩区保育・子育て総合支援センターを活用したつながりづくりなどについて、皆様からアイデアをいただき実践していくことにより、地域の力で子育てが楽しいまちの実現を多摩区として目指してまいりたいと考えております。

資料の表紙にお戻りいただきまして、本日の車座集会につきましては、この後、5の事例紹介で、お1人目として、子育てを行う中で感じた不安や困り事について、お2人目から、子育てを支援する取組について、それぞれご紹介いただきます。その後、6の多摩区保育・子育て総合支援センターの役割・活用についてご説明した上で意見交換を行ってまいりたいと存じます。

<事例紹介①>

司会：それでは、事例の紹介に移らせていただきます。

初めに、子育てを行う中で感じた不安や困り事について、3歳のお子さんの子育て中であります田中様からご紹介をいただきたいと思います。田中様、スクリーン横にお越しください。

田中（識）さん：皆さんおはようございます。田中と申します。

本日の事例紹介、妻の目線からになるんですけども、ちょっと妻の喉が花粉症で思わしくないため、私が代読させていただきます。よろしくお願いいたします。

こんにちは。田中香寿美と申します。私からは、地域で子育てをする中で困ったことや困り事の状況が好転することになったきっかけなどについて発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

まず、私のプロフィールを紹介させていただきます。出身は東京都で、現在は多摩区に住んでおります。職業は専業主婦で、以前は保育施設に勤めておりました。家族構成は私と夫と3歳の子どもの3人家族です。多摩区との関わりですけれども、2020年に結婚を機に多摩区中野島のほうへ引っ越してまいりました。多摩区は緑地や川など豊かな自然に囲まれていて、人は多く住んでいるなと思いつつも、それでいて騒がし

くない住みよいところだなと感じております。

次に、私が地域で子育てをする中で困ったことを幾つか紹介させていただきます。まず1つ目ですが、私は結婚を機に多摩区へ引っ越してまいりましたが、当初は夫以外の知り合いが1人もいなかったため、子育てについての悩みをどこに相談すればいいのかわかりませんでした。

2つ目が、一時預かりの利用についてです。育児疲れで少しの時間リフレッシュしたいなと思ったときに、事前に登録をしていないと一時預かりを利用できないことや、短時間での利用料が高いことなどから利用をためらってしまうことがありました。

最後に3つ目ですけれども、電車や商業施設などの利用についてです。必ずしも子どもに好意的な人ばかりではないなと感じていたため、移動手段として電車を使うことに気後れしてしまうことが時々ありました。また、地域の商業施設にキッズスペースが少ないので、少し離れたキッズスペースのある商業施設まで足を延ばすこともありました。清潔なトイレ、幼児用のトイレのある公園は少ないので、トイレトレーニング中は特に遊びに行ける場所が限られてしまっていました。

このように子育てに関する様々な悩みを抱えておりましたが、その状況が好転した事例を紹介させていただきます。先ほども子育て中に困ったことで紹介させていただきましたが、多摩区に引っ越してきた当初は知り合いが周りにいなかったため、子育てについての悩みなどをどこに相談すればいいのかわからず不安感を抱えていました。その中で、新生児訪問の訪問員の方から地域の支援センターを紹介していただき、利用するようになったことが状況の好転のきっかけとなりました。地域の支援センターでは、子育て世帯の交流に参加することができました。その交流を通してママ友ができ子育てに関する相談ができるようになり、子育てに関する不安感が軽減されていきました。

最後に、地域での子育てを通じて感じていることを幾つかお伝えさせていただきます。

子育てをしている中で子連れに対して必ずしも好意的でない方がいらっしゃるということは肌身で感じておりました。それは仕方のないことだとは思いつつも、やはり安心して子どもと出かけられる、遊べる場所がもっと必要だと感じております。天候に左右されずに遊べる場所、特に動きが激しくなる2歳児以降の未入园児が安心して遊びやすい場所がもっと増えるとよいなと感じております。そして何より子どもが遊びながら私たち親同士も気軽に話せる環境がもっと増えてほしいと考えております。

以上で事例発表を終わります。ありがとうございました。

司会：田中様、ありがとうございました。

<事例紹介②>

司会：続きまして、子育てを支援する取組として、中野島地区を中心に子育て支援の活動をされていますあゆみYELL代表の大庭様から、取組についてご紹介をいただきたいと思います。大庭様、スクリーン横にお越しください。

大庭さん：皆さんおはようございます。実は持ち時間が5分ぐらいと言われていたんですが、資料が結構たくさんで早回しで行きたいと思います。

これからあゆみYELLの活動を紹介させていただきます。

私、代表で職業としては助産師をしております大庭と申します。この活動は多摩区を中心に行っているんですけれども、根底にあるのは、子どもたちがどんな環境に生まれたとしても、心身ともに健康で幸せに生きていける社会をつくりたいという私の思いでして、その上であゆみYELLという活動であったり、あと、川崎市では地域の寺子屋というのを教育委員会から受託させていただいて、下布田小で寺子屋を運営させていただいたりということで、いろいろなことを今活動としております。

私が今そのような活動をしている根底には、先ほどの思いのほかに、もう20年ぐらい前になるんですけれども、第一子の子育てをしているときに産後鬱になってしまったという自分自身の経験があります。当時は産後鬱という言葉がまだ、20年前でしたのであまりメジャーじゃなくて、私自身、何かどうしてこんなに大変なんだろうとか、気持ちの落ち込みについても、これをどうしたらいいんだろうというふうにとっても苦しい状況だったんですけれども、今、勉強してみて分かることは、産後鬱というのはホルモンのバランスでなるというふうには医学的には言われていますが、ただ、ホルモンのバランスだけではなくて、誰かに頼れない環境であったり、頼れない性格であったり、そういうものがもともとあったのかなと思っています。そんな中でやっぱり思うのは、でももっと大変な人がいるんじゃないんだろうかとか、あとこれは相談するほどでもないんじゃないかとか、相談したいとしても誰に相談できるんだろうみたいな感じで3か月ぐらい悶々としていたのが20年前の私でした。

そんなとき、私、出身が熊本なんですけれども、熊本の市政だよりのほうに、3、4か月の赤ちゃんがいるママ、どうぞ集まりませんかみたいな感じで、育児相談をやっていますよというような情報を見つけました。これは多分多摩区でもされていると思うんですけれども、その何か文言がすごく気軽な感じで、すごい悩んでいる人ぜひおいでという感じじゃなかったのが、勇気を持って参加してみたんですね。私が何かどつぽにはまっていたのは誰にも頼れなかったというところだったんですけれども、そこで保健師さんとか助産師さんとかに、育児をする上で大切なのはいろんな人に助けてもらうことだよと。たくさん人に頼るのが上手な育児だよみたいなことを継続的に教えてもらって、それで次第に元気になっていって取り戻していった産後鬱を抜けていったという経験があります。

私は何とか市政だよりで情報を見つけることができて、そこに行くことができて、状況を好転させることができたんですけれども、やっぱり区役所とか育児相談というものはハードルが高い人が多いんじゃないかなというふうな思いがありまして、そういう育児相談みたいな名目じゃなくても気軽に来られる場所をつくりたいということで、あゆみYELLでは「おしゃべりサロンあゆみ」というのを立ち上げています。

ここではイベントを開催して、何か楽しいイベントがあって、興味がある人に参加してもらう、何か楽しそうだなということで来てもらうと、一応私もいるので、育児のことを助産師に相談もできる。そして、そこには地域のママたちがたくさん参加者としてもスタッフとしても来てくれるので、地域情報とか、例えば保育園のことで悩んでいたら保活の話であったりとか、そういうことを情報交換できるというふうな場にしています。

事例としてあるのは、産後鬱でお子さんを保育園に預けているお母さんが、お子さんを預けているので日中1人っきりなんです。でも、子育て支援センターとかは親子じゃないと行けないということがあって、そういうお母さんは行く場所がないというのもありましたので、このサロンでは单身でも来ていいよと、子どもがいなくても来ていいよというような場にしています。

あとは、特徴的なのは、参加して終わりではなくて、一番右のところに、団体が主催するイベントを自分で今度は講師をやってみたりとか、そういうふうに運営側に回って、支援されるだけでなくする側にも回るというか、そんなふうになるべくと回っていけるような、次への一步を応援するというようなのも目指していて、あゆみYELLというのは、その一步を応援するという意味が込められています。

このスライドもとてもすてきなスライドなんですけど、もともと参加者から運営側になってくれた、今日、参加されている嶋村さんがスライドを作ってくれています。いっぱい力を借りています。

1つは、今日の田中さんのご報告にもあったんですけど、私も転勤族で、10年ぐらい前に熊本からこちらに来まして、もうやはり誰1人知らない、誰も知らないところにやってきました。夫は会社があるので会社に行けば誰かと会えるし、子どもたちは学校に行けば友達ができて、私1人ポツンと、仕事を辞めてこちらに来て誰も知らなくて、本当に毎日泣きそうで鬱々としていた中で、やっぱり地域の中で孤立しないで誰かとつながるというのは、子どもだけでなくママだけでなく、いろんな年代の人が必要で、高齢者の方

の孤独死とかの話もありますけど、やっぱり子どもたちを地域で育てていくということを考えたときは、大人も孤立しないことが大事じゃないかと思って、ということで、あゆみYELLではこういうふうなことを考えて、共生・循環モデルと勝手につけているんですけども、おしゃべりサロンあゆみで赤ちゃんとお親の居場所があるんですが、そこから私が手がけている寺子屋では小学生の居場所があって、その居場所にはシニアの方とか地域の方が関わってくださっていて、地域の寺子屋を出るとつながるカフェという10代の居場所をつくっているんですけども、その10代の居場所に小学校を出た子たちは行けるし、そこに大学生が関わってくれていて、大学生はそのうち親になって今度はサロンの利用者になるみたいな、ぐるぐるぐると、いろんな世代の人がいろんなところで関わって、支援されたりされているという、支え合うというような、そういうモデルをあゆみの中では考えていて、今は寺子屋はちょっと別の事業になっているんですけども、これを1つの何か大きな枠の中で1つの大きな家のようなイメージでできるといいなというのが妄想としてあります。

どこかで自分も支えていてどこかで支えられているというふうに感じられることが地域で生きていく上でとても大切なことかなと思っております。

すみません。結局長くなりましたが、ここであゆみYELLの報告を終わらせていただきます。ありがとうございます。

<多摩区保育・子育て総合支援センターの役割・活用>

司会：大庭様、ありがとうございます。

続きまして、保育と子育てを総合的に支援するための施設として誕生しました多摩区保育・子育て支援センターについてご紹介をさせていただきます。

多摩区保育・子育て総合支援センター：皆様、こんにちは。多摩区保育・子育て総合支援センター、瀧澤と申します。今から当センターの役割と機能について説明をさせていただきます。スライドのほうをご覧ください。

川崎市では、保育と子育てを総合的に支援する施設として、各区に1か所の保育・子育て総合支援センターの開設を進めています。令和元年に川崎区、令和3年に中原区、令和5年に宮前区、そして令和6年11月25日に多摩区保育・子育て総合支援センターが4か所目として開所いたしました。1、2階部分は土淵保育園、園児120名定員の保育園です。一時預かり保育では1日定員10名のお子さんの保育もしています。3階には地域子育て支援センターつちぶち、続いて研修室があり、総合事務室には保育士、栄養士、看護師の職員が常駐しています。

多摩区保育・子育て総合支援センターは、子どもと保護者の居場所づくりや専門職による相談支援などの地域の子ども・子育て支援、研修や交流による区内民間保育所等への支援と人材育成、保育所における保育現場を活用した実践的な支援の3つの役割と機能があります。この3つを1か所に集約することにより、それぞれの機能を融合させながら、より効果的な子育て支援を目指しています。

この3つの機能を生かし様々な取組がされています。地域子育て支援センターには、0歳から就学前までの子どもと保護者が遊べるスペースがあり、仲間づくりや、保育士、栄養士、看護師の専門職に子育ての相談ができます。そして、研修室では、保育関係職員の研修、子育て支援講座やイベントなどが開催され、子育てや保育に関して互いに学んだりつながったりすることができます。

また、土淵保育園では、在園児以外のお子さんの一時預かり保育や園庭開放、保育園児との交流保育など、園児や保育園職員と交流しながら様々な経験を深めることができます。

多摩区内には、保育・子育て総合支援センター以外にもたくさんの地域支援があります。公立保育園は3か所、地域子育て支援センターは7か所、子育て広場・子育てサロンは27か所、保育施設等においては9

4か所あります。保育・子育て総合支援センターには足を運ぶことができない方へのアウトリーチ、地域へ出向いた取組として、公立の土渕保育園をセンター園とし、生田保育園、菅保育園をブランチ園として園庭開放や絵本貸出しなど、子育て支援の取組を実施し、区全体を補完しています。

また、左の写真のように、保育園職員が地域子育て支援センターや地域の子育てサロンに出向き講座を開いたり、主任児童委員や民間保育施設と連携した遊びの広場を開催したりもしています。栄養士、看護師も利用者のニーズに合わせて各地で講座などを開催し、多摩区内全域の子育て支援の向上に努めています。

右の写真は菅地区での公園体操の様子です。高齢者と菅保育園の園児と一緒に体操することで、高齢者は子どもから元気をもらい、子どもたちはおじいちゃんおばあちゃんとの交流を通し思いやりの気持ちが育つという相乗効果があります。

このように、多摩区では地域の困り事、心配事を踏まえ、区内の様々な活動団体や場所などの地域資源がつながり掛け合わせることで活動がちょっと豊かになる取組を、地域包括ケアシステムの掛け算「地ケ算」と名づけて進めています。

このように、つながり合いながら多摩区の隅々まで子育て支援の手が届くように、今日の車座集会をきっかけに新たな取組が見つけられると幸いです。

以上、私からの説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

多摩区保育・子育て総合支援センター：では、ここでちょっとアイスブレイクということで、お子さんがいらっしゃる方、できる範囲でだっこをしていただいて、童歌遊びと手遊びを1つずつしたいなと思います。だっこできる人はだっこしてください。はじめに「いもむしごろごろ」という童歌遊びをしたいなと思います。行けるかな。大人の方もぜひ一緒に動いてください。行きますね。左右にちょっと揺れます。行きますよ。

いもむし、ごろごろ、ひょうたん、ぽっくりこ。いもむし、ごろごろ、ひょうたん、ぽっくりこ。いもむし、ごろごろ、ひょうたん、ぽっくりこ。

手遊びは、たまごの手遊びというのをしたいなと思います。卵でいろんな料理を作ります。一緒にやってね。

卵をポンッと割りまして、そのまま食べたら生卵。卵をポン、もう1つポンッと割りまして、ジュージュ一焼いたら目玉焼き。卵をポン、もう1つポン、もう1つポンと割りまして、くるくる巻いたら卵焼き。卵を、もう1つ、もう1つ、割らないよ、もう1つと割らないで、ぐつぐつゆでたらゆで卵。卵をポン、もう1つポン、もう1つポン、もう1つポン、もう1つポンと割りまして、丸く焼いたらホットケーキ。ふんわり大きなホットケーキ。いただきます。もぐもぐもぐもぐ。ああ、おいしかった。

じゃあこれでアイスブレイクをおしまいにします。ありがとうございました。

司会：それでは、ここからの進行は福田市長にお願いしたいなと思います。

<意見交換①「孤立感から生まれる子育ての負担感等の共有」>

市長：いや、すごい技を見ましたね。急に何かぱっと空気感が変わりましたね。びっくりしました。

それでは、意見交換を始めたいと思います。前半と後半に分けてちょっとお話ししたいと思うんですけど、まず前半部分は、田中さんご夫妻から事例紹介ということでご紹介いただきましたけれども、子育ての不安、こんな不安感があったよということ。あるいはこういうきっかけで、それはよかったなみたいな、先ほど新生児訪問がきっかけになったというふうなお話もいただきましたけれども、そういうことを少しみんなで共有できればいいなと。そういうことあるよねというふうなのをみんなで共有していきたいなと思いますので、まずは子育て中の方々から少しコメントをいただいてまいりたいと思いますが、ちょっと順番にでもいいですかね。そうすると、向井さんからコメントいただいてもいいですか。

向井さん：私もちょっと花粉症で調子がよくないんですけれども、すみません。孤立感ということで、私も地元ではなかったのでもあまり知り合いがいなかったんですけれども、やっぱり子どもが生まれるまでは支援センターがどこにあるとか、そもそも支援センターって何しているのかとか、そういうのを知らなくて、新生児訪問ですとか、あと母子手帳をもらいに行ったときに、こんな感じなんですとか、こういうところにありますよということを詳しく教えていただいて。こういうところにあるんだとか、今まで通り過ぎていたけど、ここが赤ちゃんが集まる場所だったんだとか、そういう気づきがあって、動けるようになってきた5、6か月頃に初めてじゃあ行ってみようかなみたいな感じで行って、行ったら仲間がいっぱいいて、こういうところに来れば仲間ができるんだなということを初めて知ったというか、分かって、そこからちょっと輪が広がっていきながら知り合いができて、何か相談するほどでもないたわいもない話とかができて、楽しく今は育児ができていくなというふうに思っています。

市長：今はお子さんはお幾つでいらっしゃいますか。

向井さん：今1歳9か月になりました。

市長：今は大分不安は解消されたという感じですか。

向井さん：そうですね。日々のことはお出かけに行ったりとか、近所の人と偶然会ったりとか、そういうことも顔見知りができてきて、公園とかでたまに会ったりとかできたりして、今後、保育園になってとか、何か行く行くの不安はありますが、今の、何というんですかね、生まれてすぐって周りに同じような人がいない、ああ…みたいな、そういう漠然とした孤立感はなくなってきました。

市長：なるほど。田中さんと一緒に、新生児訪問でまず地域子育て支援センターのことを知り、そこに行ってみたら友達が少しできたという、そこからがきっかけですか。

向井さん：そうですね。やっぱり子どもとどこに行けばいいかみたいなのも、まず子どもを持たないと知らうと思わなかったというか、知らなかったことなので、新生児訪問のときに具体的に、お家はここだから中野島のここが近いかもしれないですねみたいなこととかを具体的に言うてくださって、ここだったんだみたいなところで。あとは、自分は割といろいろ調べて行くタイプだったので、多摩区役所でやっていた子育て講座を広報紙で見つけて応募して行ってみたりとか、あと、こうのとりの会という、それも区役所でやっているものの対象になっていると知って、それも行ってみたいして、何かだんだん広がっていった感じでした。

市長：なるほど。ありがとうございます。

それでは、北野さん、お願いできますか。

北野さん：私は、以前区役所で、今こちらに移転した絵本を貸し出していただけるウォークスルー、絵本の貸出しをすごく活用させていただいているんですけれども。もともと私は本が好きなので、子どもが生まれたら絵本をたくさん読ませたいと思っていたんですけど、ちょっと実際生まれてからどれくらいでどんな本を読ませているのか分からなかったんですが、同じく新生児訪問のときに、もう1か月からでも読ませられるよというので紹介していただいて、区役所も近かったので行ってみたというきっかけだったんですけれども、図書館よりも結構新生児、0歳、1歳向けの本が多いのと、状態もすごくきれいで借りたい気持ちになるのと、あとは職員の方がすごく子どもの成長に合わせて、今、例えばこういう絵本がお勧めだよとか。

あと、毎週通って返却して借りてというのを繰り返していたので、すごく覚えて気にかけてくださったので、先週の本どうだった、じゃあこっちにしようかというふうにコミュニケーションを取りながら絵本を毎週借りられたのが私も息子もとても楽しくて、絵本を好きになったというのもありますし、あとはやはり子育ての中で、ちょっと離乳食だとか、いろいろと悩むタイミングがあったときも、さりげなくちょっと愚痴を吐けるというか、相談をさせていただけたので、すごく感謝しています。

市長：なるほど。北野さんはもともとこの地域にお住まいで、比較的、妊娠・出産の頃というのはお友達はいった感じですか。

北野さん：住んで10年弱ぐらいなんですけれども、特に友人はいなかったもので、やはりママ友というのももちろん出産した当時はいなかったもので、さっきもお話が出ていたこのとりの会という会を新生児訪問で紹介されて、まだちょっと、出産後は外に出るのもなかなか体力的にも難しかったんですけど、すごく勧められて行ってみたら、とても行きやすく、毎月通ってお友達ができたという経緯はあります。

市長：ありがとうございます。やっぱり皆さん新生児訪問でつながってくるんですね。ありがとうございます。

続いて、川崎さん、いいですか。

川崎さん：私は、自分の状況と同じようなママ友を見つけられたときが一番孤立感から解消されたタイミングでした。どうしても支援センターに行ったとしても、今のママさんたちは、結構それぞれで、働きに出る方、そのまま自分で子どもを見る方とか、タイプが様々なんですね。やっと出会えたと思ったとしても、数か月でもう復帰するから遊べなくなるというのが結構あったのですが、1人だけ同じ幼稚園組だねというママ友がいて、そこからじゃあもう周りにいないけど、どこに行ったらいいだろうとなったときに、同じような幼稚園組のママさんが集まる幼児サークルというのをちょっと冊子の中から探して、そこを見つけられたのがきっかけとなって、そういう同じ境遇のママさんに出会えるような場所に行けたというのが私の中では一番のきっかけになりました。

市長：なるほど。それでも、あれですね、1人見つかったというふうなのは、どういうふうに具体的につながったという感じですか。

川崎さん：いや、もうがむしやらにいろんな公園に行ったりして、本当に偶然だったんですよ。やっぱり同じ境遇の人は結構同じタイミングで同じ場所に行ったりするので。

市長：なるほど。

川崎さん：とにかく1日1日の積み重ねで、この前もいらっしゃいましたよねという感じで、近くの公園に行って、毎日の積み重ねで同じようなママとやっと知り合えたというのがあったので、なかなか難しかったです。

市長：確かに。でもありますよね。同じようなタイプの方は同じような時間帯にこういうスポットにいるというのは何となく感覚的に分かりますね。ありがとうございます。

続いて、阿部さん、よろしいですか。ありがとうございます。

阿部さん：私も結婚を機にこちらの多摩区のほうに引っ越してきているんですけど、出産もこちらでしていきまして、友人も全然いない状態だったんですけど、やっぱり皆さんおっしゃっているように新生児訪問のタイミングでこうのとりの会をお勧めされて、そこがすごく大きなきっかけになったのが1つと、あと、多摩のクリニックのほうで無料の相談をされているというのをホームページで見かけて、そこにちょっと駆け込みで悩みの相談に行ったのがきっかけで、新米ママの、8か月まででしたかね、集まれる会があるんですけど、そちらのほうにも参加して、同じ境遇の人とお話しする機会だったりとか、同じ月齢の子との悩みを共有できるママさんに会えたりとかというのがすごく私の中では大きなきっかけだったなと思います。今も仲よくさせていただいているママさんもいらっしゃるので、すごくいいきっかけをいただけたなというふうには思っています。

市長：ありがとうございます。阿部さんは妊娠から出産とか、あるいはもう数か月の中で、どんなところに不安を感じました。

阿部さん：やっぱり私自身が仕事柄ちょっと人と交流する仕事をずっとしているので、1日の中で家に閉じ籠もって会話ができない娘と2人きりという境遇がもう想像以上に結構ストレスというか、大変だなという、孤独感をやっぱり感じるという時間でしたね。

市長：なるほど。何というか、1対1の状態というのがずっと続いているから、そこにほかに会話するということもなければ、そういうきっかけがないという形ですかね。

阿部さん：そうですね。もともと私自身高齢出産というのもあって、仕事もずっとしていたので、やっぱり今までの環境とがらっと変わってしまったというのが、特にその孤立感というのはすごく感じたのかなというのはいいます。

市長：ありがとうございます。他にも孤立感を感じたよという方はいらっしゃいますか。中島さん、ちょっとコメントいただいてもよろしいですか。

中島さん：本当に私も阿部さんと一緒に、ずっと仕事をしていて、もう仕事をしているのが当たり前という環境でずっと育っていて、私自身も高齢出産で初めて子どもを授かったとき、育休取れていいよねという周りの雰囲気はあるんですけども、実際に自分がその環境になったときに、私の場合はちょっと、すみません、次の番なので自分のことを話しちゃうんですけど、実際出産してちょっと体調を崩してしましまして、何か寝られない時期とかもあるぐらい追い込まれちゃったんですけど、それも結局は、どうしよう、明日もう仕事に行けないし、結局朝から晩までまた育児が始まるんだなというような、何か変わらないルーチンがずっと続いていくということに対する自分の中の何か恐怖感みたいなものを感じてしまって、早く仕事に復帰したいと思ったのが実際のところだったんですけど、ただ、仕事に復帰したらして、私の仕事の場合は土日がお休みなんですけど、市のいろんなイベントというのは基本的に平日の昼間が中心になっていて、実際復帰するとなかなかそういったイベントにも参加できず、仕事を休んでようやく参加できているみたいなところが実情でして。これは本当にお友達ができたというのは大きいんですけども、保育園でも毎日朝会って帰りのお迎え時に挨拶するお友達みたいなのはクラスの子の母親、父親にいらっしゃるんですけど、実際、今はどうしても何か困ったら、市のそういったものに頼るというよりは、自分の母親とかにお願いして来てもらってちょっと休みたいなのがいまだに私の中では実情として続いているというところはあります。

結局体調を崩したこともあって、市外でほぼ数か月暮らしていたんですけど、母親の実家で。ただそれも、常にお母さんと子どもと3人での生活だと、よかれと思いながらも母とけんかしちゃったりとか、もうこんなこと言わなきゃよかったのになというストレスでお互いにぶつかっちゃったりということもありまして、でも、かといってそれが市外にいと、川崎市のサポートというか、そういうのを使えないので、結局自分で散歩に行ったりリフレッシュするとか、そんな感じになってしまったんですね。

市長：なるほど。

中島さん：ただ、川崎市の保健師さんがずっとつながってくださっていて、その方を通してイベントを知ったりですか、あとは市外でも定期健康診断を受けられるように計らっていただいたりとか、そういった身体的な負担は保健師さんと出会って大分減ることができたんですけど、いまだに孤立感という意味ではちょっと継続しているかなという気はします。

市長：なるほど。ありがとうございます。

続いて、渡邊さん、よろしいですか。

渡邊さん：渡邊です。私も川崎市に引っ越してきたのは結婚を機に引っ越してきて、今で4年目ぐらい住まわせていただいています。最初はやはり知り合いの方もいないですし、川崎市に特に愛着を持てなかったんですけど、出産を機に、やっぱりそれこそ皆さんがおっしゃっていた新生児訪問とか、あと区役所に行って子育てのイベントとかを知って参加するようになってお友達が増えたりして、川崎市での生活も楽しくなってきた、今ではそんなに孤立感を感じていません。そうですね。

以上です。

市長：やっぱり最初の出産という形で不安だとかって、誰かにつながるまでがちょっとどうしたらいいのかなという、そういう感じですかね。

渡邊さん：そうですね。そこだと思います。

市長：ありがとうございます。

若宮さん、お願いできますか。

若宮さん：若宮です。私は2023年の4月に仙台のほうからこちらに引っ越しをしてきて、もともと関東の出身ではあるんですけども、上の子が今5歳でして、その子の子育ては仙台でやっていました。本当にそちらのときは家族も友達もいなかったの、まさに孤立感というところではあったんですけども、仕事をやっぱりしていたので、そのつながりで知っている人はいっぱいいたかなというところではあって。ただ、こっちに、この多摩区に引っ越してきたときというのは、友達もいるけど、同じ市内ではないので、気軽にすぐに会えるわけではないというところで、最初はママ友もまだいなかったの、孤立感というか、を感じる時というのはあったかなと思います。

ただ、朝いつも上の子を送ったりお迎えに行ったりするタイミングとかで、木澤さんとかに毎日ご挨拶してもらったりとかして、顔見知りの方というのが少しずつ増えてきて、幼稚園のほうでも、今、下の子の育休中で長い時間お休みができたので、その中で幼稚園の中でママ友というのが少しずつ少しずつつながるようになっていったところで孤立感からかなり解放されたかなというのは思います。今は幼稚園とかをきつ

けにできた友達と、子育てのお話とか、遊びに行ったりというのが少しできるようになったので、すごい孤立を感じているというのはなくなったかなと思います。

市長：ありがとうございます。そういう意味では、上のお子さんの関係で友達関係が少し広がったという感じですか。

若宮さん：そうですね。上の子と下の子の年齢が一緒だったりとかで、妊娠中にできた友達というのがきっかけで友達が増えたというのもあって、結構私は働きながら幼稚園に通わせているんですけども、幼稚園は働いていないママさんもかなり多くて、会えるタイミングがママさんによって全然違くて、そういったところでいろんな輪が広がってはいったんですけれども、そうですね、上の子がきっかけだと思います。

市長：ありがとうございます。やっぱりそういう何というか、上のお子さんと歳が同じとか、同じ境遇の方だと何かすんなり入っていきけるのというのはありますよね。

若宮さん：そうですね。ありますね。

市長：ありがとうございます。

続いて、成田さん、お願いできますか。成田さんはご夫妻で出ていただいていますね。

成田（友）さん：成田です。よろしくお願いします。

そうですね、まずうちはちょっとほかの家庭と違うというか、妻のほうで育休を取らずにすぐ復帰、僕がずっと、今1歳3か月なんですけど、育休を取っているというふうな状況になっています。

そうですね、やっぱり今振り返ると、何というんでしょうね、3、4か月とか、もう本当にミルクを3時間おきに与えてというふうな状況のときが、やっぱり夜しっかり寝られなかったりとか、結構そういうストレスみたいなのもあったりとかして、この状態が続いていつちゃうのかというふうなのを相談できる人もなくて。僕ら2人とも地方出身で、子どもが生まれるちょっと前ぐらいに引っ越してきたというのもあって、知り合いとかもないんで、最初、そこでちょっとけんかみたいなのもあったりもして、やっぱり頼るところとなると、そういう行政のパンフレットとか行政のサービスになってくると思うんで、すごいいろいろ細かく私がチェックして、そこで一時保育というのがあるのを知ったんですけれども、一時保育とかも結構5か月ぐらいから、早くて5か月かな、以降というのがすごい多かったんで、やっぱり3、4か月とかのときはなかなか悩みを外に出すことができなくて悶々としながらやっていたというのが、今振り返ると大変な時期だったかなというところでしたね。

だんだん大きくなってくるにつれて、こういう支援センターだったりとかに一緒に来て、そこで毎回会うお母さん方とかと少しずつ、僕もどっちかという人とコミュニケーションを取ってストレスを発散するタイプなので、そこで話とかをしたりする環境ができて、すごい家の近くなんですけど、ここは。新しくできてくださったことがすごいうれしかった、というところですかね。

市長：ありがとうございます。

成田（友）さん：ありがとうございます。

市長：奥様はいかがですか。

成田（裕）さん：今日は夫婦で参加させていただいて、ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。

成田（裕）さん：夫が言ったとおり、私たち、夫の実家は秋田で、私は福岡なので、最初から2人で育児することが確定していて、私は産んだ直後が一番大変だったなと思います。その時期は、皆さんもそうだと思いますが、やっぱり家族以外に預けられる場所というのはほとんどないですし、2人でしかやらないので、どうしてもちょっとぎすぎすしたりというのはありました。ただ、その中で、産後ケアというのを産後だったんですけど知って、割合、申し込むと早く対応してくださって、そうすると、私も休めて夫も休めて、かつ私はもう産休明けに仕事に復帰する予定だったので、復帰した後に例えば授乳をどうしたほうがいいとか、そういうのも助産師さんに相談することができたので、それを活用できたのはすごいよかったかなと思います。

市長：ありがとうございます。

ご主人のほうは、いわゆる育休を1年半という形ですか。そういう意味では、ママ友という圧倒的なマジョリティーのところ、男性の、育休を取ってパパ友とか、何か共有するのはなかなか難しかったんじゃないかなと思うんですけど。

成田（友）さん：そうですね。確かにおっしゃるとおり、支援センターに来て、ほぼほぼお母さんが多いので、何となく男性からはあまり積極的に話にくい部分もあったんですけど、できればやっぱりお父さんとかで自分と同じように育休を取ってくれる人とながれれば、もっと何というか、悩みを共有できる機会は多かったかなというのは思うので、男性の育休促進みたいなのももう少し広がればいいかなと個人的には思っていますね。

<意見交換②「負担感等を解消するための保育・子育て総合支援センターをはじめとする区内の資源を活用した取組、仕組みづくり」>

市長：ありがとうございます。

今、子育て中という方のご意見を一巡させていただきましたけれども、ちょっと見事にいろんな地域からここに、結婚を機に、あるいは出産を機にというふうに移り住んで来ていただいている方が多いなということに改めてびっくりして、やっぱり川崎はそういうところですよ。本当にそういう方が多いので、最初の育児不安に陥る、つながっていないことによって、あるいは同じ境遇の友達がいなかったことによって、何か生まれる不安感、負担感というふうなのが強いなというふうに改めて感じさせていただきました。

それを、じゃあ、どういうふうにつながっていくかということのアイデアを、こんなことができるんじゃないか、今はでもこういうこともやっているよということを、逆に子育てを支援している側の方々からのご意見をいただきたいなというふうに思っています。

ちょっと1発目は、先ほどから新生児訪問が物すごくきっかけになっているという、若宮さんのコメントでも木澤さんの名前が出ていましたけれども、木澤さん、こんにちは赤ちゃん訪問ですかね、やっていたというところで。

木澤さん：こんにちは赤ちゃん訪問は、制度ができてから、できた当初からやらせていただいています。結構訪問した家庭が地域に溶け込んできて、今、お母さんが子ども会の会長をやっていたりとか、

そういう形で地域との関わりは非常にできてきているんで、その辺は非常にいいかなと思って。

最近、私が本当に感心しているのは、今日も育休を取ったパパさんがいますけれども、私の時代は正直言って私たちは子育てにノータッチで、全部子育ては女房という感じで過ごしてきたので、本当にある意味、今の若い方、ママは恵まれているところもあると思います。

ちょっと取り留めのない話ですけど、私は毎朝、登戸小学校の登校見守りをして、ずっと立っているんですけども、保育所に送っていくパパが非常に多いですよ。私たちの時代では本当に考えられないような時代になったな、そういう意味では非常にいいかなと。

子育てを支援するというのは、なかなか私たちの年代では難しいんですけども、私は町会の活動もしていて、今、町会長もやっていますので、なるべくそういう子育てをしている方々の支援になるように、集まれるようなイベントを、例えばハロウィンとか桜祭りをやって、お子さんと一緒に来て花見をしていただいて、模擬店で何かを買って食べていただいたりとか、あとは盆踊りでちっちゃい子と一緒に踊っていただいたりとか、あとはそうですね、餅つきをやったりとか、そういう形でなるべく地域と、地域の子どもたちを私たち地域の大人がしっかりと見守っていけるような形で体制をつくっていきたいということで、常にそういう思いで今活動をしています。

1つ、この次に発言の機会があるかどうかちょっと分からないので、1つだけ市長にお願いをしたいんですけども。

市長：はい。

木澤さん：今は皆さん、まだ未就学児のお子さんをお持ちですけども、主任児童委員さんからのお話も聞いたんですが、小学校に入って、朝早くご夫婦でお仕事に行ってしまうと、子どもたちが残って鍵をかけて学校に登校するというお子さんが非常に多いそうです。親が先に出てしまうと、お子さんたちが、今日はちょっと気分が悪いから学校へ行くのをよそうかなと、登校しない子も結構増えているそうなんです。できれば、わくわくの学童保育を早朝に、7時ぐらいから、スタッフ1人でも結構ですから、わくわくの担当として置いていただいて、お母さん、お父さんと一緒に学校に行って、わくわくに預けて、お父さん、お母さんがそのまま仕事に行けるような体制を取っていただけたら、本当に助かるなと思いますので。

市長：ありがとうございます。実はそういうお声というのは、ありがたいことにいろんな地域からいただいて、今それを議論しているところです。というのは、学校の門の開閉時間が、ちょっとやっぱり教員の負担感もかなりあるので、この時間の前からは開けられませんというふうになっているんですけど、それを地域の人たちが、この前は中原区だったですかね、の方、民生委員の皆さんが、いや、自分たちで少し見守りができるよというふうに言ってくださっているところもあるんですね。なので、どういうふうに学校の負担を増やさずして地域の人たちと一緒にそういう場というふうなのをつくれるかというものを今まさに議論しているところですので、すごく温かいご意見を本当にありがとうございます。そういう視点はとても大事だというふうに思います。

しかし、本当に地域で子育てというか、皆さんからすると、小さなお子さんからすると、地域のおじいちゃんですよ。

木澤さん：もうひ孫です。

市長：何かこういうふうに自分たちの小さなエリアで、地元で自分たちの子どものようにという思いでやってくださっているというふうなのは、とてもうれしいですし、理想の姿だなと。実践していただいているこ

とに本当に感謝申し上げます。ありがとうございます。

では、松澤さんにもお話を、まさに自治会、土渕自治会の会長さんをやっておられるということで。

松澤さん：会長ではないです。

市長：すみません。失礼しました。

松澤さん：土渕の松澤と申します。自治会長が今日、三田小学校で生田地区のスポーツの何か体験コーナーみたいながあるので、そちらに出かけているので、ちょっと代理で私が。

市長：ありがとうございます。

松澤さん：ちょっとお話しさせていただきます。今、木澤さんがお話しされた、民生委員。民生委員もやっております。そのお話でもいいですかね。

市長：はい。ぜひ。

松澤さん：民生委員で土渕倶楽部、土渕自治会館になるんですが、年間10回ほどサロンをやっています。一番今まででうれしかったのは、そこに来ていたお子さんが、今年度、土渕自治会の役員さんに入ってくれて活躍しているというのが本当にうれしいことでありまして。木澤さんは赤ちゃん訪問員で行かれた方が何かやられているんですね。私はこの子育てサロンに来ていただいた自治会の会員の方が役員をやりたいと申し出て今活躍しているんですが、今、うちも自治会の会員数が、世帯数1,000人ちょっと、1,200人弱ですかね。本当はもっと入るはずなんですが、自治会に入っても何ですかね、大したメリットがないよという方が、今の若い方は多いんですね、引っ越されてきて。それも確かにそうではあるかなというのを感じてはいるんですけれども、そうではなく、地域に、自治会に入ってもらって、自治会に入ったらこういうことも楽しめる、ああいうことも楽しめるというのを今の自治会長は考えているので、ぜひ自治会に入っていただきたいなと思っております。

市長：ありがとうございます。そうですね。ぜひ皆さん、この中でも自治会に入っていच्छやらない方は、ぜひ入っていただきたいですね。

松澤さん：そうなんですよ。ひどい話は、組ごと抜けるというのが、昨年、その前にあって。昔だと、電灯が切れたら自治会のほうから、防犯灯ですね。今は違うんですよ。直に役所に連絡してやってもらう。市政だよりなんかも、自治会に入らなくてもどっかに行けばあるし、そういったことが、入らない理由だと言われると、いや、どういうものかな、なんて思っております。

市長：ありがとうございます。やっぱり何というんでしょう、小さなエリアでなるべく、例えばここも1か所しか、区に1か所しかない施設なので、なるべく先ほどご説明していたブランチャだとか、あるいはもっと小さく、エリアで、そんなに遠くに行かなくても子育てが充実しているという環境をつくっていかなきゃいけないといったときに、やはり自治会の人たちとの連携というのはとても大事だというふうに思うんですよ。

違う事例ですけれども、今年、全国都市緑化フェアをやって、いろんな緑でつながれないかなという取組

をいろんなところでやっていただいています。ずっと公園の管理をしていただいているのは自治会の方、一生懸命やって、花壇も整備してくれているんですけども、そこに地域の保育園が加わりまして、一緒に花を育てましょうということで。今、保育園は園庭のない園がすごく増えているので、公園を園庭代わりに使っているところも多いと。そうすると、一緒にお花を育てましょうということで、保育園と自治会がつながったりなんかして、いい子育ての相乗効果が生まれているんですよね。

ですから、そういう意味で、自分のところ、別に、得は何があるのかという感覚じゃなくて、そうすると、つながることによってみんながハッピーになっていくという世界観をつくっていかなくちゃいけないですよ。

松澤さん、ありがとうございます。

安藤さん、そういう意味では地域のネットワークの郵便局ですね。郵便局長さんをされておられます。本当に地域の高齢者の見守りなんかもしていただいているありがたい存在ではありますけれども、コメントをいただいてもよろしいですか。

安藤さん：中野島郵便局の局長の安藤です。

私も川崎のほうには、長男が小学校に入学するとき、次男が保育園に入るとき、長女、一番下の子が生まれて3週間で引っ越してきました、全く本当に右も左も分からない状態でスタートした感じなんですけど、長男は学校に行けば友達がいる、たまたま次男の保育園、幼稚園の送り迎えというか、バスで行っていたんですけど、そこに隣の家の人が同じ子どもがいて、一緒にバスに乗って行ったので、そこでつながりができてというのもあったんですけど。実際に郵便局で仕事していると、お子さんが生まれて通帳を作りに来たりとか、引っ越してきましたという形で転入届とかを出しにいらっしゃる方がいるので、そういった方にこの子育てのチラシじゃないですけど、こういうイベントをやっていますよとかと渡したいんですけど、ただ、それを勝手に持ってきて渡していると、私が勧めたような感じになってしまうので、例えば市とか区とかから、区がこういうのを配布してくださいとかいう形で依頼していただけると、本当に配りやすいです。

もしくは掲示板とかも出したりとかできるんですけど、この間ちょっと会議があって、多摩区の郵便局長のほうに確認をして、そういった子育て支援関係のものとかを掲示したり配ったりとかするような機会があれば協力していただけますかと話をしたところ、全局オーケーですと話はいただいているので、そういった機会があれば、そういった形で何かちょっとご協力できればなと思っています。

市長：すごくありがたいですね。情報発信の場としても郵便局がご協力いただけるというのは、それは、区長はご存じでしたか。

区長：郵便局さんのほうからは、いろんなことに協力いただけるということで、郵便局の局長さん、本局の局長さんとかとはお話を何回か重ねさせていただいていますので、本当にありがたく思っております。

市長：そうですね。掲示したり配布したりしていただけるというのは、あらゆる機会が重層的にあること自体がすごくきっかけになるので、とてもありがたく思います。ありがとうございます。

それでは、大橋先生、よろしいですか。

大橋さん：ありがとうございます。登戸新町で開業しています多摩ファミリークリニックの大橋です。

そうですね、うちも開院して15年になるんですけども、なので、開院してきたときに子どもだった子が新米ママになって連れてくるという、ちょっと複雑な気分を最近味わったりとかすることも多いんですけども、新米ママというイベントをもう7、8年。

石原さん：10年。

大橋さん：10年。失礼しました。10年ぐらいやっています。もちろんいろんな子育てサロンとかがあるんですけども、医療者が関わっているということで、より気軽に、必ず医者も行くようにしています。そういう時間の中で気軽に話ができるということが1つと、あともう1つは、やはりお母さんの体調が悪い、またメンタル面も含めてですけど、そういうのはご本人が気づいていらっしゃらないんですよね。やっぱりもう赤ちゃんのことで精いっぱい、自分の体調不良とかメンタルの不調に自分でお気づきになっていらっしゃらないという方もいて、そういう方に関してはやっぱり積極的にこちらから声をかけて拾い上げていくというのを1つの活動にしています。僕も今ちょうど本当に産後鬱になりたての方を診ていますが、そんな形で、やっぱりなかなかメンタルクリニックに行くのにも抵抗があるという方もいらっしゃいますので、そういう方も積極的に受け入れたりとかという形にしています。

今日、新生児訪問という話があって、すごくいい機会だと思うんですけども、やっぱりそれ以外、いかに地域のリソースにつながっていくかというところの機会が、より身近になるといいのかなとは個人的には思っていて、例えば何でしょう、必ずいらっしゃるのは予防接種ですね。僕らで言えば予防接種とか乳幼児健診でいらっしゃるので、そういうときにこういう、大庭さんなんかはうちにも週1回来ていただいているので、こういうサロンがありますという話をしたりとか、あとは今日スーパーの方もいらっしゃっていますが、おむつ売場のところにそういうチラシがあったらまたいいのかもしれないとか、いろんなふだんの生活の中でそういうところへ触れられる機会というのがあればいいかなというふうに思っています。

あとそうですね、男性、やっぱりパパの協力がある家とない家というのはすごく大きいのかなという。男はやっぱり頭がデジタルなんですね。この先、皆さん今いらっしゃる方が悩むというのは、次、保育園へ入ると毎月熱を出すようになるんですよね。もうそれが今度次の悩みになるんですけども、それは改めて医療者が伝えればいいんですけども、何回も熱を出すとお母さんは不安になっちゃうんですよね。そうするとお父さんは、徹底的に調べてもらえと始まるんですね。男の頭はどうしてもデジタルになる。お母さんは逆で、そんな悩んでいる私の心に共感してほしいというのがメインなんですけど、僕も最近知ったので、それは。やっぱりパパ向けの何かいろんな教育というのが必要なのかなということで、うちのクリニックは今ちょうど1年の育休を取っている男性医師が今1人います。4月に帰ってくるので、楽しみに待っているところです。

あと、だんだんだんだん、今この時期ですけど、僕らもう10年、15年診ているので、多いなと思うのは、この地区の方は小学校になると習い事をさせる家がめちゃくちゃ多いです。5つやっている家が普通にあるんで、これというのが、すごいそういう意欲が高い人が多いのか、それともやっぱり学童とかだけだと間に合わなくて、子育てと自分のお仕事の両立を図るために習い事をさせているのかということとか、ちょっと複雑な側面があるかなと思うので、ここら辺も市のほうで介入していただけるとありがたいな、なんて思って聞きました。

以上です。

市長：ありがとうございます。

石原さんも続けてコメントをいただいていた方がいいですか。

石原さん：多摩ファミリークリニックの看護師をしています石原と申します。

先ほど大橋のほうからもお話があったと思うんですけども、ママカフェ、「集まれ！新米ママ」というのを9年、10年ぐらい前から始めています。もともとの始まりは、やはり登戸は、皆さんと同じで、おっ

しゃっていたように、ここの地域に結婚してから初めて住んだよという方が結構10年ぐらい前から多かったですね。うちはクリニックなので、お母さんたちだとかとワクチンのときとか乳児健診のときとかにお話ししたりとかする機会があるんですけども、そのときに、やはり自分から何か情報を得てそこに行けるお母さんはいいんですけども、中には、やはりそういうことができない、ちょっと鬱々みなお母さんとか、あとは性格的にそういうところに自分から進んで行けないお母さんとかという方がいらっしゃって、そういう方たちを拾っていくというか、そういう方たちを外に引っ張り出していけたらいいなというところから始まったママカフェになります。

今もう随分長い間やっているんですけども、私たちはクリニックなので、結構自分たちの中だけでやってしまうことが多いんですけども、今、地域のほうでいろんな活動をしている方がいらっしゃって、いろんな集まりがあるので、そういう方たちの情報を私たちも知りたいし、そのことでお母さんたちに、そのお母さんの性格とか、そのお母さんの本当の困ったこととか、そういうのに合ったところをご紹介しますことができるとか、相談に乗ってあげることができるとか、そういうのを地域みんなでやっていけたらいいなと思います。

市長：いいですね。もう8年、9年続けていただいているんですか。

石原さん：はい。

市長：いや、すごいですね。こういうのがみんなで見れたらいいし、もっと、近くのところこういうことがあるんですよということと、今、石原さんにおっしゃっていただいたように、この分野というか、こっちはこういうのが得意だから紹介しますねと、お互いに紹介し合えるみたいなことができるとう本当にいいですよ。

石原さん：そうですね。ママカフェの中でも、やはり雰囲気は違っていたりとか、あとやっているコンセプトが違ってたりとかするので、お母さんが本当に欲しいところにつないでいってあげられるということができるといいなと思います。

市長：なるほど。

鈴木さん、先ほど大橋先生がコメントしているときに大きくうなずいておられたので、ちょっとコメントをいただいてもよろしいですか。

鈴木さん：ありがとうございます。NPO法人ままとんきっずの鈴木と申します。

ままとんきっずは産前産後ヘルパーの派遣から、地域の子育て支援センターで、こういったこども文化センターで、もうほんとこの風景が、この中にスタッフがいるといった感じのサロンを市から委託して運営させていただいております。

それから、地域の寺子屋で小学校の放課後事業、大庭さんと下布田小で、また登戸の東菅小学校なんですけれども、中学校で、いのちの授業ということで、赤ちゃんふれあい体験ということで、助産師さんのお話をさせていただいて、ちょっとコロナ禍ではできなくなっちゃったんですけども、ちっちゃい赤ちゃんと中学生の方たちで触れ合っていて、自分たちが生まれたときのことを考えていただくといったような授業も、ずっと継続して行っております。

それぞれの段階の親御さんたちのいろんな悩みとか、どんなときにお母さんたちがつらい思いをされるのかといったことを、割と長いタームで見させていただいております。

先ほど大橋先生のお話でうんうんうなずいていたのは、よくパパさんは妊娠していないからパパの実感がなかなか湧かないんだよみたいな話を聞いていたんですけど、えっ、それまでの10か月間、何の勉強もしていないのと思っちゃうんですね。それまでも事前勉強は全然できるんじゃないかなと。そういったところにこのもっと光を当てられれば、ママたちが鬱々としたときにパパから、こういったところもあるみたいだよみたいな、そうしてあげると、やっぱりママとしても見てくれているんだと。

先ほどママのほうは共感が欲しいというふうにおっしゃっていたんですけども、共感というか、同じ目線で、同じ立場で、当事者意識といいますか、そういったものを持っているかどうかというのを、解決方法じゃなくて、そういった同じ意識を持っているんだというふうに思えると、ママたちは、ママ友がたとえいなくても、同じ子育ての意識を共有してくれている、本当にママ友じゃなくて、何でパパが、もちろん、すみません、シングルなご家庭もあると思うので、もちろんそれはそういった別の支援とかが必要だと思うんですけども、同じ共闘するご家庭をもうちょっと支援すればと思って。皆さん寂しい孤立感を持っているママたちがつながるまでが大変だという、つながったらやっというんな安心感が得られるというので、支援センターとかに行ける元気なママたちですら、いや、大した相談じゃないんですけどと話し始めると、ぽつりぽつりと涙が流れてきて、ああこんなに苦しかったんだとママ自身も気づけなかった悩みとかがあると思うので、なかなか自分から自分に合った場所、先ほどおっしゃっていたと思うんですけども、やっぱりママたちによっては、このママ友が合わないとか、いろんな家庭環境が違うと合わない、なかなかそういった自分たちに合う居場所づくりというのが本当に大変で。すてきなカフェとかいろんな居場所はたくさんあるんですけども、どこが自分にマッチするのかが分からない、今日行きたいと思ってもその日にはやっていない、とか。

支援センターも週3日なんですね。毎日やっているわけじゃない。今行きたいけど、今日はもう朝10時過ぎちゃったわ、今から行っても支援センターは1時間もやっていないわ、みたいな感じになっちゃうと、どんどん行けなくなってしまうということがあると思うので、元気な、まだ生まれる前の状態から、何かに登録なりなんなりができて、自分に合ったそういう地域の情報にもうアクセスできる準備はしておいて、本当にくたくたになっちゃうとそういうのを調べる気力さえなくなっちゃうと思うので。ネットワークで、こういうサービスをやってますよとか、そういったのもたくさんあるんですよ。子育て情報を発信しているサイトとか、川崎市のとか、いっぱいあるんですけど、でも、ママさんたちはそこにはなかなか行き着かないのであれば、もう本当、母子手帳と一緒に、ここに登録しておいてくださいね、みたいな、何か困ったらここから自分の居場所を見つけてくださいね、なんていうのがあればいいのかなというようなことは、いろんな支援をしている中で思いました。

以上です。

市長： ありがとうございます。

これから、かわさき子育てアプリというふうなのを大幅に改善しようという試みを、7年度にやる予定で、8年度からフルスペックで変わるというふうな予定をしています。というのは、今、鈴木さんにおっしゃっていただいたように、例えば妊娠の届出のとき、母子手帳交付のときとか、もうとにかくその瞬間から必ずこのアプリを入れてくださいということで、必ずプッシュでどんどん情報が出ていくというようなアプリに向けて改善を行っていくことをしています。そういうデジタルな、わざわざ見に行かなくても、登録を1回しておけば、年齢だとか、イベントに合ったものというのがプッシュで配信されてくると。その中で予約もできるというふうな、スマホ1つで全部できるようにしていこうというふうな形は整えていきます。

一方で、アナログ的なものもすごく大事で、やっぱりデジタルで見ているだけでは中身がよく分からないということを、どうやってアナログの人のつながりで補っていくかというのは、ずっと延々と必要だと思う

んですよ。お互いに、何々先生から紹介された、どここの何々さん、木澤さんから紹介されたよとか、鈴木さんからこっちがいいよ、石原さんも、こういう、うちはこうやっているけどあっちのほうがいいと思いますよみたいな話というのが重層的に出ていくと、とてもいい形になってくるのではないかなというふうに思っています。

お待たせしました。島田さん、先ほどの安藤さんの郵便局と同じように、いなげやさんも地域の商業施設として、もう必要な暮らしのインフラですよ。そういう中での子育てという見方だとか、どういうことができている、できていない、あるいは、とかという思いがあったら、ちょっとお話しいただけますでしょうか。

島田さん：いなげやスーパーマーケット店長、島田と申します。よろしくお願いします。

一応4月オープンを目掛けて今準備しているところなんですけど、1年3か月ぐらい休ませてもらっていて、これからといったところの準備をしているところです。その中で、今いろいろお話を聞かせていただいた中で、掲示物だったり配布物といったところは率先して協力させていただけるのかなというのが1点と、お店を造っている中で、やっぱりこのエリアのファミリーヤング層といったところは1つターゲットになるのかなと考えていますので、逆にこういった機会をいただいて、父親として何もしていなかったなという部分も含めて、非常に今勉強させてもらっているんですけど、今後ここに縁を持たせていただいた方が売場ないしお店に来ていただいたときに、こういったものがあるといいなというのを言っていただけるのも非常に助かるのかなと。

あとは、お届けの支援だとか買物サポート、こういったところは比較的会社のほうでも、最近ですけど、強めになってきている部分もあるので、本当に生の意見が聞けるこの場というのはすごい楽しみにしていた部分もあるんですけど、今後、こういったものを置いてくれとか、こういう配布物、掲示物、ここにいいかといったところも含めた中でご協力させていただければありがたいなと思っております。ありがとうございます。

市長：ありがとうございます。やっぱり公共施設でもいろんなもの、例えばきれいな環境のいいトイレだとか授乳室だとか、あるいはおむつを換える台だとかという、そういう基本的なベースのインフラは必要だと思うんですけど、公共施設ではとてもじゃないけど間に合わないの、いかに民間の施設の人たちがその設計の中に入れていただく、あるいはちょっとした、そんな大それたものが欲しいわけではないと、ちょっとしたものといったところにも協力いただけると、その箇所がどんどん増えていくと、何か子育てしやすいエリアだよと、どこへ行っても大丈夫というふうなことになるのと、すごくうれしいなと思っています。

掲示物のご協力だとか、とにかくきっかけというふうなものがあつたら、すごく、さっき大橋先生の、びっくりしましたけど、おむつの売場に何かかかっていたら、それはすごいターゲット層ですよ。どんぴしゃの、このおむつを換えている人たちに伝えたいものというのは一番認知しやすいですよ。何かそういうようなアイデアもあるなと思って、すごく勉強になりますよね。ありがとうございます。

それでは、引き続き、大庭さんから先ほど事例紹介をしていただきましたけれども、同じくあゆみYELLの嶋村さんからコメントをいただいてもよろしいですか。

嶋村さん：あゆみYELLの嶋村です。大庭さんの下でボランティアをさせていただいておりますが、どちらかというと支援者というよりも私も支援されている側だなと、いまだに思っております。

大庭さんとの出会いは、母が多摩ファミリークリニックに毎日通うお仕事をされていて、そこで見つけた新米ママのチラシを母が見て、私がそれこそ産後鬱のような状態でずっとひきこもりだったので、こんなのを見たから多摩ファミさんの新米ママへ行ってみなよということで新米ママに行つて、大庭さん、あと皆さん

に出会って、サロンに行ったり、あと、ままとんきっずの情報もそこで得て、ままとんきっずさんにも行ったりとかして。新米ママをきっかけに、あゆみとままとんきっずに行ったことで、産後鬱からどんどん解放されて、今元気に過ごしております。

私自身は、自分も支援している側だけど、やっぱり支援されている側だなといまだにずっと思っているのは、大庭さんたちと一緒にボランティアをさせてもらっているメンバーたち、そこでのつながりで、ちょっとLINEとのやり取りとかでも、自分の不安だった思いとか今悩んでいること、幼稚園の送迎問題、保育園の送迎問題の悩みとかも、ちょっとぶちまけたりとかできるこの環境があるというのが、私はすごく心の支えになっております。

私自身、地元が川崎市麻生区新百合ヶ丘で、今までに10回ほど引っ越しているんですが、川崎市を出たことがないぐらい川崎市が大好きなんですけれども、そんな私ですら、こんなに支援スペースというか、支援されている方々たちがこんなにいるんだということと、支援センターもいっぱいあるんだということを知らなかったんですね。直近で出産をした知人に、こういうところがあるよとか、それこそ本当に全部紹介したんですね。そしたら、ずっと、もうおじいちゃんの代からずっと地元の中野島に住んでいる子ですら知らなかったと言っていて、地元の子たちすらそういう情報を得ていないというのを私は今すごく考えていて、どうやったらみんなにこういうところがあるんだよというのが知れ渡るのかなと、今すごくずっと考えています。

特に産後ママさんたち、妊娠をした女性は、インスタグラムをすごく見るが増えるらしくて、皆さん、インスタとかはどうですか、見ていますかね。きっとそうだと思うんですけど、そこで情報を得るということがすごく多いらしいので、インスタグラムの活用についてもちょっと考えていきたいなと思っています。

市長：なるほど。今、皆さん、インスタを使っていますか、うんとうなずいておられましたけど、そうなんですね。でも、嶋村さんは、このファミリークリニックの新米ママのところから始まって、あゆみYELLで、ままとんきっずと、すごいフルで、フル活用ですね。

嶋村さん：ちなみに……

市長：お願いします。

嶋村さん：すみません、いいですか。私自身一歩踏み出すことができない性格で、中野島支援センターとかがあるのは知っていたんですが、何かできているグループの中に入るというのが全然できなくて。ということで、さっき石原さんが言っていた、私はそのターゲットだなと思っています。そういうママさんもいるんだよということをちょっとぜひ知っていただきたいです。支援センターは、なので、今まで一度も行ったことがないです、いまだに。

市長：なるほど。いや、さっきも鈴木さんが言われていたんですけど、やっぱり踏み出せる、来られる人たちはいいんですけど、そこにリーチできない人たちにいかに届くかというところがすごく大事なところで、まさに今日はそういう議論で、次につなげていきたいなというふうに思っているんですね。

どうでしょう、南雲さん、専修大学の学生さんですけども、若い発想からも、どうやってつながっていくかということもいろいろアイデアなんかがあるんじゃないかと思うんですけども、ちょっとコメントをいただいていいですか。

南雲さん：南雲です。よろしくお願いします。

今、専修大学のほうでまちづくりに関する研究室でいろいろ活動していて、個人的にも登戸とか遊園の地域の活動に参加しているというところなんですけど、ちょっと話を聞いていて3点ほど、大学生というか、大学の観点から何かできることがあるんじゃないかなと思ったんですけど。今年、多摩区の連携事業で防災に関する活動をやらせていただいて、そこでイベントをやったんですけど、やはりなかなか子育て世代の方と大学生というのは接点が、全くではないですけど、ほとんどなくて、イベントをやったんですけど、やっぱり来ていただく方は年配の地域の方が多くて、なかなかその世代の方が呼べなかったなというのがちょっと課題かなと感じていて、来年とかもまたそういうイベントをやっていく予定なので、何か大学生ともうちょっとこの子育て世代の方と接点が得られたらいいなというふうに結構感じました。

大学生と地域の人との交流がなかなかないというのは1つ課題かなと思うんですが、私がやっているわけではないんですけど、うちの学部としてやっていることがあって、小学生などを対象に、今回いる人たちよりは年齢が上な方々だとは思うんですけど、小学生を対象に、大学で学んだ成果を生かしてワークショップをやってみたり、あとは大学で、大学の学部が情報学部なんですけど、プログラミングの教育を小学校でやってみようみたいな、そういう事例を大学でやっているの、何かその辺をうまくつなげられないのかなというのを1つ感じました。

あともう1個、地域の活動をいろいろ、これは個人的に参加しているのがあるんですけど、さっきも何かコミュニティーとか、緑化フェアのお話をされていて、緑を通したつながりというところもあったと思うんですけど、ちょうど登戸の辺りでやっている「のぼりと園芸部」という活動に私も参加しているんです。そこは区画整理できて、余った空き地で活動していて、そこにも見ていると保育園のお子さんとかが結構来られて、楽しく遊んでいる様子がすごい印象的だなと思うんですけど、空き地に来なくても、近くに公園があるのに何で空き地に来るのかなと思ってちょっとお話を聞いてみたら、空き地は結構狭いんですよね。何か僕からすると狭いスペースで遊ぶのはすごい窮屈かなと思っていたんですけど、逆にその狭くて見やすい範囲で見られるのがいいよねみたいな声もあって、何かそういう新しい、というか大学生だと分からない考えも得られたりして、そうやってつながっていけると面白いなというふうに思いました。

すみません。この3点です。

市長：いや、ありがとうございます。大学生が地域に関わっていただくって、こんなに心強いこともないんですよ。

実は昨日、寺子屋のことについての全体会、フォーラムをやっていたんです。そこに高校生、大学生も入ってくださって、意見交換したんですけど、やっぱり大学生とか高校生の話、意見を聞くと、いや、僕たちおじさんでは考えつかないようなことがたくさんあって。今、高校生、大学生合わせて50人の人たちが寺子屋事業に関わっていただいているんですね。意外と高校生より大学生のほうがハードルが低いという形で、全然関わりたいです、高校生ももっと関わりたいですというふうな話を言っていたので、先ほどの、情報を知らなかったということが多過ぎるので、どうやっていろんな機会、情報のフックというか、かけていくかなということがすごく課題だなと思いました。先ほど南雲さんのコメントもすごい共通しているなと思っていて、ぜひこれからもよろしくお願いいたします。

それから、蒲さん、ソーシャルデザインセンターから来ていただいていますけれども、コメントをいただいてもいいでしょうか。

蒲さん：はい。多摩区ソーシャルデザインセンターで活動している大学4年生の蒲と申します。

多摩区ソーシャルデザインセンターでは、子育て支援として、こども食堂だったり、あとはちょっと小学生対象にはなっちゃうんですけど、ドッジボール講座とか、あと運動会を河川敷でしたりとかというところで、親子の居場所を地域で、こども食堂なんかは特に地域で空いている保育園の営業後だったり、デイサー

ビスだったりという、地域で身近にあるところで開催をしていて、やっぱり今お話を聞いていて、家事にプラスして仕事も育児もすごく忙しいと思うので、そういったパパ、ママが月に1回でもご飯作りをお休みして、あと今、パパ友、ママ友との交流も必要というところをお聞きしましたが、そういった気軽に来て楽しみながらゆっくり食事ができるようなこども食堂を開催しています。

小さなお子さん連れの方は特に、外食とかへ行くと、お店だったり周囲にすごい気を遣っちゃって、ゆっくり食べられないかなとも思うんですが、私たちのこども食堂ではどんなに騒いでも大丈夫ですし、あとはこういうマットを敷くことで、小さなお子さんでも寝転ばせられたりできるようなふうにして、気軽に、気を遣うことなく過ごしてもらえるように、ちょっとそんな思いで行っています。

今現在、多摩区内で6か所ぐらいやっていて、月に1回なんですけど、1回当たり大体400人ぐらいの方が来てくださっていて、運営は主に学生なんですけど、地域で、ここの川崎とか多摩区で生まれ育った学生も行っていて、学生が支援しているようには見えるんですけど、逆にこうやって身近で子育てのリアルな現場を見せていただいたりとかお子さんと関わる機会をもらうことで、自分が保護者になったときどんなふうになるのかという想像をさせてもらったりとかというロールモデル的なところで、助け合いになっているなというふうに思っています。

あとは、私もそうなんですけど、保育士の資格を取得したりとか、あと教職を取っている学生も多くて、教育ボランティアとかで実際に子どもと携わる経験も今させてもらっていて、そういったところで多摩区ソーシャルデザインセンターでは子育て支援に関する人材育成にも取り組んでいるところです。

市長：ありがとうございます。素晴らしいですね。大学4年生ですよ。

多摩区のソーシャルデザインセンターは非常に特徴的で、学生さんたちが圧倒的に多いというか、中心的に回していただいているというふうなのは、他区に例を見ない素晴らしい取組で、今まだ結婚をされていない、あるいは子どもをお持ちでない状況でも、こういうマットを敷いてとか、あるいは子育て中のお母さん、パパさんとかというのは、外食できない、ちょっと遠慮しますよねということまで気を遣って、そういう場を設けていること自体にすごいなというふうに思いますし、そういう、何か先ほど嶋村さんもおっしゃっていましたが、自分が支援している側なのか、支援されている側なのか、どちらでもあるというふうなことを言われましたけど、蒲さんのお話はまさにそうでしたよね。

自分が親になったときのロールモデルを今見ているから、何か場を提供しているのか、されているのか、よく分からないという感じですよ。そういう社会は本当にいいな。どちらが何をしているわけでもないという形の何か関係性というふうなのができていけば、すてきなというふうに思っています。

吉野さんも地域の中でお仕事をさせていただいて、それこそ地域の中でコミュニケーションを取ること、お客様を通じてというのがたくさんあると思うんですけども、コメントをいただいてもいいですか。

吉野さん：そうですね。僕はまちで1人で、ガラス張りの美容室で働いているというか、個人で営業しているんですけども、名前も「YUENHAI R」で、何か美容室は結構格好をつけた名前とかをつけがちなんですが、「YUENHAI R」とつけたのは、単純に遊園で一番いい美容室みたいな感じがするという、何かちょっと多分人と発想が違うのかなというのは自分でも自覚しています。子育てもそんなに不安とかはなく、小1と2歳の子どもがいて、楽しくやらせてもらっているんですけども、多分その理由となっているところが、僕の場合は地域に顧客という形で知り合いが5、600人いるんですよ。毎月会いに来てくれるので、向こうから子どもの話をしてきたり、あとは、1対1でマンツーマンでは気難しそうだった人だったが、子どもの話になったら打ち解けられたとか、そういうプラスの、子どもが生まれたことによる面の経験がすごく多かったんですよ。

1人で開業したときに、自分の子どもが店長になったらいいなということで無人の駄菓子屋さんを始めて

みて、そこにどんな子どもたちとかが来るのかなと思って。外で支払いが完了する感じになっていて、ガラス張りのつくりなので、僕は見ているだけというか、まなざしを向けているだけなんですけれども、初めてみて3年間1人でやっていて、一番来たのは未就学児を連れた保育園帰りの方だったんですよ。ああそうだよなと思って、ずっと見ているけど、買いに来ない人もいますし、もう毎日買いに来るけど会釈しないで行く人もいますし、やっぱりそれぞれのコミュニケーション方法はいろいろだと思うんですけど、ガラス1枚隔てて見ているだけというところで、何か来やすさとかはあったのかなとか、現代の人のコミュニケーションの、密なスタートというのはちょっと難しいのかなという部分とかをすごく感じて。

ただ、何度か来てもらってこちらから勇気を出して話しかけたときに、やっぱり皆さんうれしそうにしたりとか、その次からはもっと気やすくなったりとかしているのを感じたので、やってよかったなというのと同時に、ちょっと話が長くなるんですけど、そこまでは1人でやらせてもらっていたんですけど、ちょっと出会いが、看護師さんと助産師さんと2人、出会いがありまして、その方たちと、今、月に1回店で、定休日の日に「まちの縁側」というタイトルで「NAGOMI」という活動をさせてもらっていて。かなりうちのお店の立地がフラットなというか、バリアフリーな感じで、ガラス張りなので、絶対目につきますし、まちの暮らしの動線上にあるので、入ってきやすいとは言わないですけど、やっぱり必ず目につくところがあるので、そこで何かちょっとみんなでわいわい子どもが集まれる場所とか、寺子屋ではないですけど、本当に、ただ、大人も子どもも年齢関係なく集まるという活動をやってみたらどうということが起きるかなというのをやってみて、それで、今1年近くやってみたんですけど、手伝ってくれている看護師さんの方がケアということをすごい大切にしている人で、もう子どもを育てている人のケアとかだけで収まるのはちょっともったいないし、それだと物理的な対症療法にしかないから、多世代集めて、大学生も中学生も老人の方もみんな集めて、みんなが取りあえず世代とかというのを置いておいて、そこで何か楽しく過ごして、あんたはどこの誰なのという出会いをちょっと始められてから、何か、あんたたちはそんなことを悩んでいるのねという、違う世代の人たちとかが理解できたりすると、子どもが例えば外で楽しく遊んでいたりと、公園で大きな声を出したりとかしても、優しいまなざしを向ける人が増えたらいいなとか、そういった何かちょっと全ての人が関わられるような感じの取組を今していて、かなりふわふわしているんですけど、実感みたいなものもありまして。

未就学児の支援って何だろうと思ったときに、その次のカテゴリーの小学生が今どんなことをしているのかとか、小学生が遊びに来てくれて話を聞くことが大事だったりとか、そういうので多世代交流が結局全ての世代の問題を解決する突破口になるのかなと思って、今日ここで皆さんの話を聞いたときに、やっぱり物すごくいい空間であることは間違いないと思いますし、意見もすごいすばらしいものだったので、これがこの規模じゃなくて、川崎市の150万人に広がる輪になったら、もう完璧と思って。

市長：そうですね。

吉野さん：ちょっとそういうのをわくわくしながら、そんなに、ボランティア活動なので責任もなく楽しくやれているのが僕の今の活動です。

市長：ありがとうございます。すばらしい活動ですね。

吉野さん：ありがとうございます。

市長：というか、このふわっと感、ふわっとしているんですけど、このふわっとがいいですね。何というかあんまりがっというのよりも、なんか気軽に、ふわっと、ふらっと、座ってみる。会話が生まれるということ

ころからだ、すごくいいなと思います。

今、川崎市立の井田病院のお医者さんで、西さんという医師がいて、その人は全国的な活動をしているんですけど、社会的処方ということをやっている。医師なので、普通だったら処方箋を書いてお薬を出すじゃないですか。でも、それはちょっと限界があるなというふうに感じて、いや、この人だったら実はこういう活動に参加したほうが、この人の健康だとかウェルビーイング的にいいんじゃないかということで、活動を紹介するとか、あるいは場を紹介しているというふうなことをやっている医師とその周りの人たちがいるんですよね。まさに吉野さんもそういうようなお話だと思うんです。何というか、何をということじゃないけれども、そういう場というものをつくって、いろんなものを紹介してあげたりとかという、ちょっとしたアドバイスだとかということ、看護師さんですか、助産師さんですか。

吉野さん：そうです。看護師と助産師が。

市長：という形でやっていただいている。まさにまちの保健室みたいなことをやっていただいているというふうなのは、すごくいい取組ですよ。ですから、例えば吉野さんのところから大橋先生のところに、専門的なのはこちらにご紹介した例がありますよとか、そういうサロンがありますよみたいな話もできていけば、お互いに、先ほど来の話じゃないですけど、お互い紹介し合えるというふうなことになっていけばいいなと思います。

最初に大庭さんからお話いただきましたけれども、今の皆さんたちのお話を聞いて、少しコメントをいただいてもいいですか。

大庭さん：ありがとうございます。何か思っていることが共通していたりとか、悩みも共通していたりとか、すごくふだん、自分でも思っていたりママたちからも聞いていること、いろんな要素が入ってきて、いろんな意味で確認、確認というか確信みたいなもの、ああやっぱりこういうふうなことが必要だよなという確信にもなりましたし、あと今日改めて、例えば郵便局の方であったりスーパーの方であったりとか、やっぱり今まで何か子育て支援というときは、どうしてもママ友さんであったりとか子育て支援をしている団体さんとか、私はちょっとクリニック、大橋先生とか石原さんともずっとお付き合いがあるので、その限られた、私は医療系の人間なので医療系とかだけで閉じそうになっていた部分があったんですけど、そうじゃなくて、いろんな立場の人と、YUENさんもそうですけど、いろんな立場のいろんな人と手をつなぐことで、可能性がさらに広がるというのは、今日この時間だけですがすごく感じて、何かわくわくしました。

市長：そうですね。ありがとうございます。何となく今の大庭さんの話じゃないですけど、支援というふうな、言葉になっちゃうと、やや福祉的なのかなとかというふうな形、そういうふうな感じで捉えてしまうと、うちは福祉とは関係ないんですという話になっちゃう。そこで終わっちゃうもったいなさがありますよね。もう少し大きく考えて、いろんなものが生まれてくる、つながってくるような、今日はそういう会の気がいたしました。それこそ、いなげやさんのような、ショッピングする場から、郵便局だとか、いろんな地域のリソースをどううまくつなぐかというところに何か機があるんじゃないかなというふうに思いました。

冒頭の皆さんからのコメントで、気軽に相談できるというか、相談窓口まで行かないと相談できないということじゃなくて、何かのきっかけみたいなのがあれば、どんどんつながっていくということですから、どういうふうにみんなが有機的に結びつくのかなということを、今後、多摩区のほうでさらに深掘りしていくということですから、今日はきっかけで、次は、区長、あれですよ、地域デザイン会議のほうにつなげていくというお話で、少しちょっとポイントをいいですか。

区長：昨年も地ケアのことを車座でやって、今年の地域デザイン会議の中でその話を広げていったということになりますので、今日いただいた皆さんからのお話、不安感だとかそういったもの、さらに支援したい方のつながりというものもあると思いますので、次、来年度、地域デザイン会議の中で、さらに皆さんの活動だとか、悩んでいる方をつなげるようなことができればいいなと思っています。その際にはぜひご参加いただければなと思っておりますし、また、区役所としても日頃からもうできることは、今日いただいたお話の中で可能なことは実現していきたいなと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。

市長：ありがとうございました。

今日はこの場、保育・子育て総合支援センター、私たちは保子センと言っているんですけど、この保子センというのが新しくできて、これがセンター的な役割を担っていくということになりますけれども、ここだけじゃなくて、もっと広がりを持ったアウトリーチだとか、あるいはいろんな団体だとか、活動されている皆さんたちをつなぐという、そういうような役割も果たせていけたら、より効果的になるのではないかなというふうに今日改めて感じさせていただきました。

皆さん、コメントをいただきましたけど、最初に事例発表をしていただいた田中さん、コメントはありますか。ご夫婦のどちらでも結構です。

田中（識）さん：すみません。我々は最初のほうで事例発表等をさせていただいたんですけども、やはり皆さんのお話を聞いて、似たような悩みをお持ちなんだなということと同時に、これだけ地域の中でもまだ自分たちも知らなかったようなたくさんの支援の場を提供いただいているということに、非常に感謝しております。こういった場で仕入れたことも含めて、私たちが知り合っているパパ友、ママ友とも情報を共有し合って、ぜひそういったところも活用させていただきたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いいたします。

市長：どうもありがとうございました。最後、すばらしいコメントで締めていただいたなというふうに思います。まさにこういう輪が、多摩区の中、あるいは川崎市内の至るところで、誰でも気軽にそういう情報が手に入るというか、きっかけになるような場だとか、きっかけだとかというのもつくり上げていきたいなというふうに思っております。

今日はもっとコメントしたいなという方がたくさんいらっしゃったと思いますけれども、ご協力をいただいて、本当にありがとうございました。

それでは、そろそろ時間になりましたがコメントは大丈夫ですか。では、この辺りで締めさせていただきますと思います。皆さんどうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。以上をもちまして、第73回車座集会を終了とさせていただきます。